

平成29年度 実地研修会（平成28年熊本地震の復旧・復興の現状）事業の概要

1 熊本地震に伴う熊本城の修復事業（仮称）

平成28年4月14日に発災した平成28年熊本地震により、熊本城は過去類を見ない甚大な被害を受けました。

その被害は、倒壊・崩落一部損等を含め重要文化財建造物13棟及び再建・復元建造物20棟の全てが被災し、石垣は全体の約3割に当たる約23,600㎡に崩落や膨らみ・緩など膨らみ・緩など修復を要する箇所が見受けられるほか、便益施設等26棟も屋根や壁が破損し、地盤についても約12,345㎡に陥没や地割れが発生するなど熊本城全域に及びます。

この甚大な被害を受けた熊本城復旧には長い歳月と多経費を要するが見込まれ、現在把握している被害だけでも、その被害額は、概算で約634億円に上ります。

〈熊本城復旧の基本的な考え方〉

- 1 復興のシンボルである天守閣早期旧を目指す。
- 2 文化財的価値を損なわない丁寧復旧を進める。
- 3 復旧過程の段階的公開を行い、観光資源として早期再生を図る。
- 4 耐震化など安全対策に向けて最新技術も取り入れた復旧手法の検討を行う。
- 5 “100年先の礎づくり”として未来復元整備に繋がる復旧を目指す。

.....熊本市中央区



2 一級河川木山川28年発生河川災害復旧工事

木山川は、西原村を源流とし、益城町を通り、熊本市の加勢川（緑川支川）へ繋がる県管理河川です。

〈被災状況〉

木山川は布田川断層帯の北側に沿って流下する河川で、断層地震により広域的地盤沈下（約0.6～1m）が発生、沈下が下流より上流の方が大きかったため、縦断勾配が緩くなりました。また、堤防は広域的地盤沈下に加え、亀裂や緩みによる沈下（0.3m程度）が発生しました。これにより、熊本市と益城町の約8kmの区間にわたり流下能力が不足することとなりました。

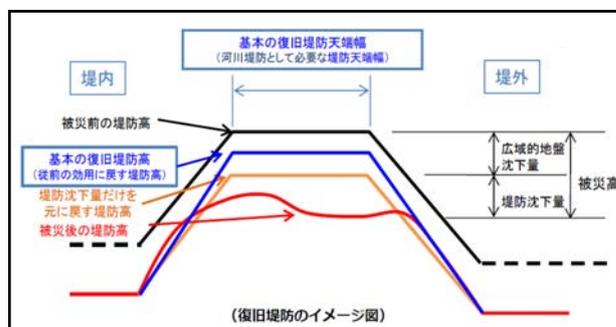
〈復旧の基本的な考え方〉

- 1 堤防等の復旧高は、堤防沈下、広域地盤沈下による河川縦断勾配緩傾斜化により低下した治水機能を「従前の効用」に回復する高さとする。
 - 2 堤防天端幅は、従前の効用を確保する幅とする。
 - 3 早期に治水機能を回復するため、用地買収を伴う復旧は極力行わない。
- ※ 上記に基づき、平成28年9月に災害査定を受け、災害復旧工事を実施しています。

〈応急工事〉

工事完了までに2回の出水期（H28、H29）があるため、仮堤防として大型土のう（高さ約1m）を設置しています。

.....熊本県上益城郡益城町木山



被災直後



応急工事完了

3 阿蘇大橋地区斜面防災対策工事

……………熊本県阿蘇郡南阿蘇村立野地区

4月16日未明に発生した本震により、熊本県阿蘇郡南阿蘇村立野地区において長さ約700m、幅約200m、崩壊土砂量は、約50万 m^3 に及ぶ大規模な斜面崩壊が発生しました。

この崩壊により阿蘇地域の生命線である道路・鉄道等の交通インフラが失われ、地域住民の生活・経済に深刻な打撃となり、早急な復旧が求められています。

崩壊斜面の頭部には多数の開口亀裂や切り立った滑落崖があり、余震や降雨による更なる崩壊の危険性がありました。

このため、崩壊斜面下部では無人化施工技術を駆使するとともに、斜面頭部への分解組立式バックホウの空輸、高所法面掘削機（遠隔操作）による不安定土砂の除去を行い、昨年末には緊急的に除去が必要であった頭部の不安定土砂の撤去が完了しています。

現在は、崩壊斜面下部での有人による施工環境が整い、交通インフラの復旧に向けた調査が進められるとともに、崩壊上部では斜面の恒久的な安定化対策のための準備工事が進められています。

(平成 29 年 5 月 現在)

